

認知 vs 言語の脳内抗争史

ソシユール『一般言語学講義』が封印した
人類史のパンドラの箱を開ける



柴田勝征

NPO法人「言語研究アソシエーション」理事
福岡大学名誉教授・埼玉大学名誉教授

2014年6月28日
福井工業高等専門学校

はじめに

私は2011年に、福岡大学の教職課程担当同僚教授から依頼されて、福岡県教組の教育研究集会共同研究者となり、福岡県の教師たちの30年に渡る教育実践研究の成果を見ているうちに、彼らの驚くべき実践的な成果の原因を深刻に考えるようになった。そして、その根本的な原因は人間の脳内の認知と言語の強力な相互関係にあることが次第に明らかになってきた。2012年度のグラフ電卓研究会で、その経過を報告させていただいたが、今回はその後の研究の発展について発表をさせていただきます。

「インド・ヨーロッパ祖語」の発見 (Wikipedia ウィリアム・ジョーンズ (言語学者)より)

ウィリアム・ジョーンズ

(Sir William Jones、1746年9月28日 - 1794年4月27日)

当時イギリスはインドの植民地化をすすめていたが、一方で考古学的研究も盛んであり、ジョーンズは1783年、カルカッタ（現:コルカタ）にイギリス東インド会社の雇用による上級裁判所の判事として赴任し、ベンガル・アジア協会を設立して会長となり、翌年インド考古学調査の研究会を発足させた。サンスクリットを学び、『マヌ法典』や『シャクンタラー』の翻訳を出版した。

1786年、サンスクリットが古典ギリシャ語やラテン語と共通の起源を有する可能性があることを指摘し、この研究成果は同時代の西欧社会に大きな反響を呼んだ。1794年、カルカッタで死去した。

サンスクリットは、その古さもさることながら、驚くべき構造をしている。ギリシャ語より完璧であり、ラテン語より豊富であり、そのどちらよりも精巧だが、動詞の起源や文法の様式において、これらの言語と偶然とはとても思えないほどの強い類似性を持っている。実際、その類似性の強さは、どんな言語学者でもその三言語をすべて調べれば、おそらくは既に消滅してしまった共通の祖語から派生したのだと信じずにはいられないくらいである。同様に、ギリシャ語やラテン語ほど顕著ではないが、ゴート語とケルト語も、他の言語との混合も見られるが、サンスクリットと同じ起源を持っていたと思われる。さらに、今日のテーマが古代ペルシャを論じるものであったなら、古代ペルシャ語を同じ仲間のリストに加えてもよかつただろう。

これらの業績により、ジョーンズの名は比較歴史言語学界で永久にその名を記される存在となり、その後グリム兄弟等によって、印欧語比較言語学が輝かしいスタートをきった。

ところが、1916年に出版されたソシュール『**一般言語学講義**』が、言語学を**通時言語学**と**共時言語学**に2分し、従来の比較言語学を言語の歴史的側面を扱う「**通時言語学**」と規定し、言語の共時的（非歴史的、静態的）な構造を重視し、ある一時点における言語の内的な構造を対象にすることで、全的に言語を理解することになると強調しました。この考え方は、言語学界の枠を超えて当時のアカデミズムに絶大な影響を与え、「**記号論**」や「**構造主義**」と言った思潮が大きく発展して行くことになりました。

他方、ウィリアム・ジョーンズらの研究によって誕生しかけていた「**世界歴史言語学**」は音韻、音声変化研究の大きな進展の直後に、諸言語の文法構造の歴史的変遷の比較には至らないうちに流産してしまい、世界の言語学界からはほとんど姿を消してしまいました。

そのような風潮の中にあっても、孤軍奮闘してインド・ヨーロッパ諸言語の歴史的変遷の研究を精力的に続けてきたのが、わが日本の**松本克己**氏です。松本氏はインド・ヨーロッパ諸語が（修飾語）＋（被修飾語）という日本語の様な語順（**主要部後置型**語順）の祖語から出発して、その真逆の語順である（被修飾語）＋（修飾語）の語順（**主要部前置型**語順）へと歴史的に語順の逆転を続けたこと、ヨーロッパ諸言語はその変化を一貫して続け、中世から近代に移行する時期に語順の逆転が完成したことを検証しました。

さらに松本氏は、もう一方のアジア側の印欧語であるサンスクリット語とその後継言語は、途中からUターンして元の**主要部後置型**に戻ってしまったことも詳しく解明しました。

他方、1899年に中国で**甲骨文字**が発見されたことによって古代中国文明の解明に大きな前進がありました。それまで「神話」でありフィクションだと思われていた**司馬遷**の『史記』に描かれている**殷王朝**の皇帝などが実在の人物であったことが証明されました。

この中国**甲骨文字**に記されている古代の漢字を研究した**橋本萬太郎**氏は、現代では（連体修飾語）＋（名詞）の語順（**主要部後置型**語順）となっている中国語が、**甲骨文字**以前には真逆の（名詞）＋（連体修飾語）という語順（**主要部前置型**語順）だったことの痕跡を残す地名や人間関係の表現が記されていることを指摘しています。さらに、**橋本**氏の研究によれば、中国語の文法構造の歴史的変化を見ると、（動詞）＋（連用修飾語）という**主要部前置型**語順から（連用修飾語）＋（動詞）という、日本語に似た**主要部後置型**語順に次第に転換しつつあることが見て取れます。ただし、中国語の南方方言には、まだ**主要部前置型**の語順が強く残ってもあります。

橋本氏は名詞句の変化に引き続いて動詞句の変化が発生したのは**周**の時代としていますが、その変化はその時点で完成したものではなく、現代に至るまでゆっくりと逆転現象が完成へ向かって継続しているように見えます。しかし、このような動詞句の語順の逆転現象が顕在化したのが橋本氏が主張するように、**周**および**春秋時代**の頃だとすると、ヨーロッパで古代ギリシャだけが紀元前に語順の逆転が起きて**古代ギリシャ文明**が突然花開いたように、古代中国においても名詞句、動詞句の語順の逆転現象が顕在化した時期に、ちょうどその頃に、「**諸子百家**」と言われる、哲学・思想の爆発現象が起きたことが注目されます。

《Wikipedia 「諸子百家」から引用》

諸子百家（しよしひゃっか）とは、中国の**春秋戦国時代**に現れた学者・学派の総称。「諸子」は孔子、老子、荘子、墨子、孟子、荀子などの人物を指す。「百家」は儒家、道家、墨家、名家、法家などの学派。

橋本氏が発見した中国語語順の**主要部前置型**から**主要部後置型**への逆転のプロセスは、実は中国語だけの孤立した現象ではなく、まったく同様の現象（ただし、**主要部後置型**から**主要部前置型**への逆転現象という方向性において、中国語とは鏡像関係にある）がヨーロッパ諸言語で起きたことが**松本克己**氏の発見なのだということが、最も重要なポイントです。**橋本**氏が中国語の場合には語順逆転の歴史的転換の方向が、北方から南方へ、という地理的な方向と一致している、と喝破したのと同様に、ヨーロッパ諸言語の場合も、語順逆転のスピードは隣接言語が**主要部前置型**のセム語（アラビア語など）であった言語ほど逆転のスピードが有意に早くなっているのです、この点でも中国語の場合と全く同じなのです。

さらに、実は、**橋本萬太郎**氏が中国語について発見した**主要部前置型**語順から**主要部後置型**語順への逆転現象は、中国語単独の現象ではなく、中国語を有力な構成メンバーとする「**孤立語族**」という言語族全体に見られる現象であるという筆者（柴田）の説を以下に解説して行きます。

現生人類の言語は発生当初は四つのタイプがあった。

(A) 主要部後置型語順

(A-1) 歴史的に語順が不変な言語（日本語、朝鮮語など）

(A-2) 歴史的に語順が逆転した言語（ヨーロッパ諸語）

(B) 主要部前置型語順

(B-1) 歴史的に語順が不変な言語（アラビア語を含むセム諸語、オーストロネシア諸語）

(B-2) 歴史的に語順が逆転しつつある言語（中国語などの**孤立語族**）

★Wikipedia 「**孤立語**」から引用。

孤立語（こりつご、英: isolating language）とは、言語類型論において、言語を形態論的な特徴から分類したときの類型の一つで、理想的には一語が一形態素に対応する、総合の指標が非常に低い言語のこと。**分析的言語**（ぶんせきてきげんご、英: analytic language）の最も極端なタイプである。

孤立語に分類されるのは、シナ・チベット語族の**中国語**（特に古典中国語）、**チベット語**、**ビルマ語**などや、マレー語をのぞく東南アジア大陸部の言語（**ベトナム語**、**ラオス語**、**タイ語**など）、および**クメール語**、**サモア語**などである。

タイ語は中国語と比較すると、**主要部前置型**から**主要部後置型**への変化があまり進んでいないことが分かります。特に、名詞修飾語が名詞に後置されて、後ろから直前の名詞を修飾する点で、中国語との違いが際立っています。ただし、ここで「**中国語**」と言っているのは現代標準語のことで、**中国語**でも南方方言では形容詞は古代以来、後ろから直前の名詞を修飾する**主要部前置型**をキープしているようです。

しかし、**タイ語**でも、平叙文から疑問文を作るときの、疑問文であることを表示するマーカーma'y (=「か」)などが文末にくること、また、疑問詞の位置は、それが対応する普通名詞などの置かれた位置でそのまま疑問詞に変わり、位置の移動をしないことから、たいていは文末か、文末に近い位置に存在する、などの点は明らかに日本語と同じ**主要部後置型**の特徴になっています。

さらに、動詞と助動詞の語順が、4分類される**タイ語**の助動詞たちの内、2種類が“must go”のタイプの(助動詞) + (動詞)型であり、残る2種類が「行かなければならない」のタイプの(動詞) + (助動詞)型であるという、逆転過渡期にある言語に必ず見られる、歴史的に逆転した語順とまだ逆転していない語順との混在現象が見られます。

松本克己氏が発見したヨーロッパ諸言語における統語語順の歴史的な逆転現象と橋本萬太郎氏が発見した中国語などの孤立語における統語語順の歴史的な逆転現象という、言語学の歴史における二つの世界的な大発見は、天文学の歴史との類推として比喩的に表現すると、ティコ・ブラーヘによる膨大な観測データを分析することによって太陽系惑星の運行を完璧に決定する三法則を発見したケプラー的な段階（武谷三男の「三段階」論でいうところの「実体論」的な段階）に当たると思われます。

[太陽系惑星の運行に関するケプラーの三法則]

〈第1法則〉太陽の回りを運動する全ての惑星は、太陽を1つの焦点とする楕円軌道を描く。

〈第2法則〉惑星と太陽を結ぶ線分が、惑星の運動と共に移動して行く時に描く扇方図形の面積については、一定時間に描かれる図形の面積は軌道上のどの点から出発しても、常に同じ値となる。（個々の惑星の面積速度は太陽との相対位置によらず常に一定。）

〈第3法則〉惑星の公転周期の2乗と、軌道の半長径の3乗の比は惑星によらず一定である。（惑星の公転周期は太陽からの平均距離の $3/2$ 乗に比例する。）

この、ケプラーの三法則は、実はニュートンによって、（天体とは限らない）すべての物体の運動を規定する「運動方程式」と、すべての一対の物体（質点）間に働く「万有引力の法則」という極めて一般的な法則を太陽系の惑星の場合に当てはめることによって、微分・積分の計算から導かれることが示されました。

ニュートンの運動方程式

$f = m \frac{d^2\vec{x}}{dt^2}$: (力) イコール (質量) と (加速度) の積。

万有引力の法則

$f = K \frac{mM}{r^2}$: 距離 r だけ離れている 2 つの物体（質点）の質量がそれぞれ m と M であるとき、それらの間に働く力（引力）は、それらの質量の積に比例し、距離の 2 乗に反比例する。比例定数 K を万有引力定数という。

これが、武谷「**三段階論**」では「本質論」的な段階と言われるものです。

人類の言語に関する統語構造の歴史的変遷に関する**松本・橋本**の大発見も、実は、以下で解説する、人間の一般的な認知が二つの型、すなわち「**ズームイン型**（**“東洋脳”**）」と「**ズームアウト型**（**“西洋脳”**）」の二種類がある、という筆者（柴田）の発見と、この認知の型が、**主要部前置／後置型**語順と非常に強い相互作用を持っている（対立・抗争／協調・協力）という二つの法則（仮説）から、現生人類の全ての言語の統語構造の歴史的逆転現象、あるいは歴史的不変性が導かれるのです。そしてさらに、この逆転のプロセスが完了すると、文明史的な大事件が起きたことが、**言語史**と**世界史**の年表を並べて比較すると分かるのです。これが、人類文明史研究の**ニュートンの段階**（武谷の「本質論」的段階）というわけです。

[ズーム・アウト／イン仮説]

世界の全ての言語話者は、以下の2つの認知分野で、**タイプ (A)ズーム・アウト型** (“西洋脳”)、**タイプ (B)ズーム・イン型** (東洋脳)、の2つの内のいずれか1方に分類される。2つの分野の内の1つで**タイプ (A)** あるいは**タイプ (B)**と決まれば、残りの分野でも同じタイプを取る。

(I) 社会的な空間認知 (住所)、時間認知 (年月日)、人間関係認知 (姓名)

(i) 住所の表示

(A) Nanakuma 1-1, Johnan-ku, Fukuoka City, Fukuoka Prefecture, Japan

のように**ズーム・アウト (視野を拡大)** する。

(B) 福岡県福岡市城南区七隈 1-1 のように「大 → 小」と**ズーム・イン (視野を縮小)** する (焦点化する)。

(ii) 暦の年月日の表し方

(A) The 4th of July, 1776 (= 4_7_1776) のように**ズーム・アウト**する。

(B) 1776年7月4日 (= 1776_7_4) のように**ズーム・イン**する。

(iii) 姓名の表し方

(A) Isaac Newton のように「名前」＋「姓」の順序で表す。

(B) 湯川秀樹 のように「姓」＋「名」の順序になる。

(I I) 1 1 以上の複合数詞の結合順序

(A) 「1の位の数 (またはその短縮形)」＋「10 (または10の数詞を短縮した接尾辞など)」という順序で結合されるが、数が大きくなって行くと、あるところで結合順序が突然逆転して、「上位の数」＋「下位の数」という順序に変わる。どこで逆転するかは、言語族によって異なる。

(例) ゲルマン、アラブ、ヘブライ：9 9を越えると逆転

スラブ、英語、：1 9を越えると逆転

フランス語、イタリア語：1 6を越えると逆転

スペイン語、ポルトガル語：1 5を越えると逆転

(B) 1 1 から無限大まで一貫して上位の位から下位の位へという順序で数字を並べて行く。

10以上の数の名称リスト

1 1

1 2

1 3

1 4

1 5

1 6

英語 :	eleven	twelve	thirteen	fourteen	fifteen	sixteen
ドイツ語 :	elf	zwelf	dreizehn	fierzehn	funfzehn	sechzehn
フランス語 :	onze	douze	treize	quatorze	quinze	seize
ポーランド語 :	jedenas'cie					
	dwanas'cie					
		trzynas'cie				
			czternas'cie			
				pie,tns'cie		
					szesnas'cie	
フィンランド語 :						
	yksitoista	kaksitoista				
			kolmetoista	neljatoista		
					viisitoista	
						kuusitoista

上の何れの言語（主要部前置型）においても 1 1 以上の数字の名前は、

1 + 10, 2 + 10, 3 + 10, 4 + 10, 5 + 10, 6 + 10,

というように、**1 の位から数えています。**

文法構造を持った人類の言語が発生した時点では、既に人類は世界の各地に分散していたものと考えられます。そして、ズーム・アウト／イン型認知パラメータと主要部前置／後置語順パラメータの違いによって、次の4タイプの言語が発生しました。

ズーム型認知 ＼ 統語の語順	主要部前置	主要部後置	宗教の傾向
ズームアウト型 （“西洋脳”）	インドネシア語、 古典アラビア語、	印欧祖語 ←（ヨーロッパ） ⇐（アジア） ← フィンランド語	一神教（キリスト教、イスラム教、ユダヤ教）（例外*1 インドはヒンズー教）
ズームイン型 （“東洋脳”）	中国語祖語、⇒ ベトナム語 ⇒ タイ語、 ⇒ ナムハラ語 ⇒ （エチオピア） など	日本語、朝鮮語 モンゴル語、 バスク語、トルコ語、ハンガリー語 クシ語（エチオピア） など	多神教、二神教 （例外*2 トルコは イスラム教）

ヨーロッパ言語の語順がOV型からVO型に転換した時期

ギリシャ語 紀元前5-4世紀

数学、自然哲学の発展 ===> アラビア語へ翻訳

----- (断絶) -----

イタリア語 紀元（後）14世紀

===> **ルネッサンス**

ギリシャ古典をアラビア語からラテン語へ翻訳

スペイン語 紀元（後）15世紀

===> レコンキスタ（イスラム教の支配から脱出）

大航海時代の幕開け

ドイツ語 紀元（後）15世紀

===> ルッターの**宗教改革**

（聖書を**VO語順に転換したドイツ語**に翻訳）

オランダ語 紀元（後）16世紀

===> **北欧ルネッサンス**

（フェルメール、レンブラント、ルーベンス）

「東インド会社」設立 => **植民地獲得へ**

フランス語 紀元（後）16-17世紀

===> **啓蒙思想**（ルソー、ボルテール、等）

英語 紀元（後）16-17世紀 ===> **啓蒙思想**（ジョン・ロック、等）

（ただし、英語の場合には、進行形（ing）や完了形（have + pp）の確立は18世紀まで遅れるが、その遅れを取り戻すかのように、18世紀後半になると、大英帝国は**産業革命**を起こし、「**世界の工場**」として全世界の支配に乗り出す。）